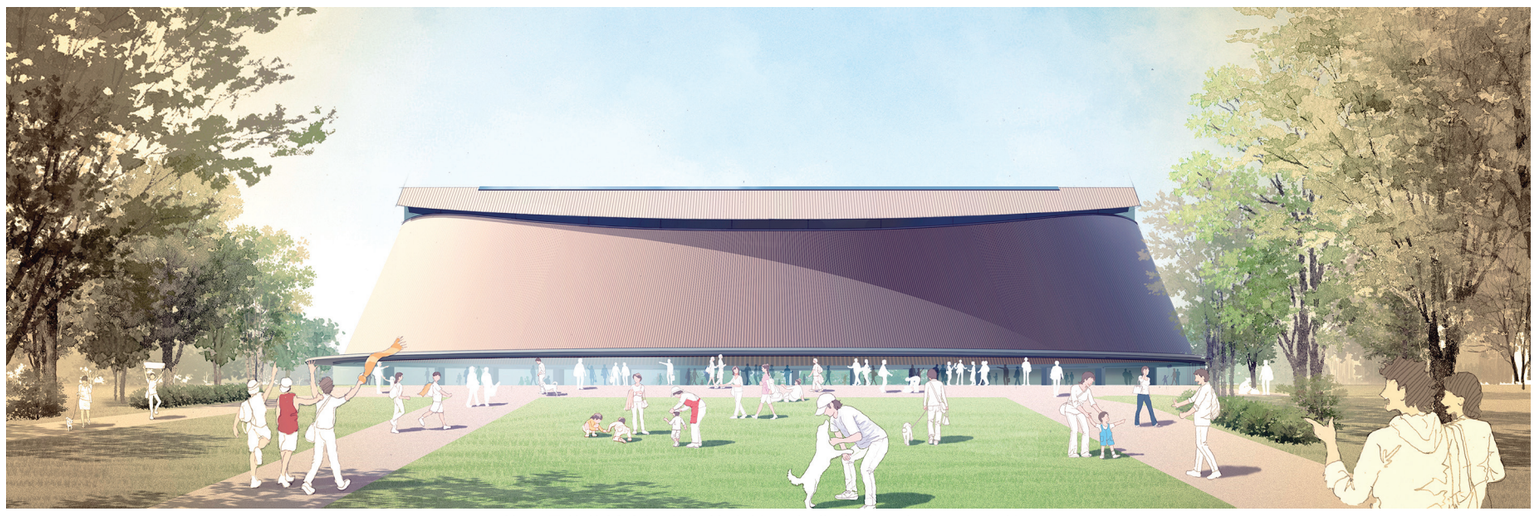
建築保全センター2014年度公共建築月間　記念講演会

2014. 11. 27



静岡県草薙総合運動場体育館の完成イメージ（コンペ時）

記念講演会「成熟しないための方法」について

建築家・東京大学名誉教授
内藤　廣氏

建築保全センターは、２０１４年度公共建築月間記念行事として、11月27日に東京都港区の建築会館ホールで「保全技術研究会・記念講演会」を開催した。地方公共団体の関心を集めている公共施設等総合管理計画づくりにかかわる「戦略的な公共建築マネジメントの取り組み：個別解決に向けて」をテーマに、研究報告やパネルディスカッションを実施。建築家として常に新たな挑戦を続けている東京大学名誉教授の内藤廣氏（内藤廣建築設計事務所代表取締役）が、ストック社会における逆説として「成熟しないための方法」について講演した。

これからお話しすることは、このセミナーの主題の「ストック社会」とは、かなり異なっています。

私が２００１年から10年間、東大で社会基盤工学の教壇に立ったのは、「建築」と「都市工学」と「土木」をつなげる、もしくは風穴だけでも空けることがミッションでした。教えた学生たちが活躍し始めるのは20年後くらいでしょう。そうしたら、実際の社会に少しは影響が出てくると信じています。

でも、少し遅かった。その前に３・11がやってきてしまった。ちょうど私の最終講義の日でした。その後、復興に向けた国や県や市町村のさまざまな委員会にかかわってきましたが、とかくインフラの話ばかりが優先されます。そこに人の暮らしの視点から意見が言える建築家がほとんど呼ばれていないのが問題です。

復興では、建築家としてではなく、人として向き合わなければなりません。大槌町の復興戦略会議では、三陸で初めて急激な人口減少の将来推計が示されました。委員の新聞記者から「そうならないための議論をする委員会ではないのか」と言われ、はっとしました。縮退しないロジックを、誰も考えようとしていないことに気が付いたのです。縮退を単に受け入れるのではなく、いかに生きるかを戦略化しなければならないと思いました。縮退、成熟、ストックといったディフェンシブな考え方では足りないのです。

私たちの暮らしには、「人口」「技術」「自然」の３つが大きなインパクトを与えています。そして、私たちが思い描くことは、この３つの要素がいつもパラメーターとして働くことによって、思いどおりにはいきません。所詮、この国はわれわれが思ったようには成熟していかないのです。

私たちの社会は、既に人口減少傾向にありながら、いまだに坂の上の雲を目指す上り坂に立っているつもりでいます。高度成長を前提とした１９６０年前後に作られた法制度や社会システムを引きずっていて、これらが復興を阻む要因となっています。今は、私たちのビジョンを「縮退・成熟・ストック」という守りから少しリフトアップするような新しい考え方が必要なのではないかと思っています。

寺田虎彦が『災害は忘れた頃にやってくる』と言いましたが、これに『思わぬ方からやってくる』と付け加えたいと思います。地震や津波にばかり目がいっていると、火山噴火やケミカルハザードなど、それ以外の災害が襲ってくるかも知れません。次に起こることに対する想像力のトレーニングが求められます。

文化とは、まとまりかけては壊され、成熟しないようにバイアスがかかるものではないでしょうか。それをまた新しい技術開発によって克服していく中で、新しいビジョンや新しいライフスタイルがでてきます。人口や経済の縮退より、私たちの思考が縮退することが一番の危機です。外からやってくる技術革新や災害に身構え、受け止める思考力と強さを持たなければなりません。

津波後の陸前高田の空撮は、東京大空襲後の東京の空撮に似ています。焼野原は終わりであると同時に始まりでもあり、この風景を頭に入れて前川國男さんや丹下健三さんがつくった戦後の建築は、人々の希望としての役割を果たしたのです。いまの私たちにもできるはずだと思います。

今回、防潮堤や盛土の計画を考え直すような発言をしてきましたが、いったん動き出した巨大なシステムを止めることはできませんでした。東日本大震災における教訓は、今後に生かす必要があります。首都直下や南海トラフはいつ来るか分かりません。また、それ以外の災害の可能性もあります。そうした非常時のための制度設計を急ぐ必要があると思っています。

建築と都市と土木のノウハウを結集できれば、もっとソフトランディングできたと思います。たとえば、想定浸水域２㍍以下のところはけっこう広い。克雪住宅のように１階をコンクリートにした住宅を建てるなど、建築的なアイデアを入れることで、防潮堤などのインフラの負荷を減らせるようなあり方もあったかも知れない。自然災害に対するディフェンスを国家が保障する、という明治以来の土木中心の近代国家の考え方には限界があります。災害から暮らしをどう守るかと考えるとき、日々の暮らしについて最もノウハウを持っているのは建築家です。国家的枠組みから考える土木、暮らしから考える建築、その中間をまとめる都市計画という構図ができれば、もっとクリエーティブな新しい都市像を描けるはずだと思っています。

渋谷の駅を中心とした都市再生特区の委員会の座長をやっています。超高層がこれから６本も立ち上がってきます。ディベロッパーは、とかく「ストック」で考えがちです。でも、それではガチガチの街が出来上がってしまいます。ここでやろうとしていることは、渋谷をよりパワフルでクリエーティブな街にすることです。縮退、成熟、ストックとは逆方向のことをやろうとしているのです。

ことしのハロウィンに、渋谷が仮装した若者であふれ返りました。私には理解はできないけれど、学生運動の時代のように若いエネルギーがなぜか集まってくることは面白いと思いました。ここにこれからの社会を考えるヒントがあるような気がしました。

かつての開発スキームでは、放っておいたら成熟した「まともな街」になってしまいそうだったので、各街区の設計を担当する大手設計事務所に、それぞれデザインアーキテクトと組んでもらいました。つまり、予定調和的になりそうなところに、新たなバイアスをかけて意図的に混乱をつくり出そうとしたのです。都市を静的なものととらえて自分のユートピアに当てはめてしまったら失敗します。動的なもの、生命としてとらえなければ、ディベロッパーの金勘定ではいくら成功しても、街は滅びます。成熟は死と隣り合わせなのです。

ひとりの建築家としては、いつも新しいこと、誰もやっていないことをしていたいと考えています。技術的に新しいことに挑戦していると、かならず未知のことが起きてきます。成熟とは逆方向です。設計では未知のことに対して常に気持ちが身構えている。なおかつ意識が外に向かって開いている感じが大切です。

建設中の「静岡県草薙総合運動場体育館」では、設計でも施工でも日本一難しいことに挑戦していると思っています。木構造の大スパンを、想定される大地震に耐える強度で実現しています。免震層の上にコンクリートリング、そのうえに２５６本の天竜杉集成材を建て、約２３００㌧の鉄骨屋根を支える構造です。ここで使われている技術は、ＲＣ、ポストテンション、免震、木造、鉄骨トラスなどです。施工プロセスによる荷重の変化を予測して、巨大な建物にもかかわらず、施工時に誤差５㍉前後の精度で納まっています。異種素材と異種工法を厳しく精度監理して組み上げました。

これだけ難しいことをやりつつ、木で包まれたような温かい空間が実現しています。「君はここに居ていいよ」と思える空間になったと思います。３・11以降、被災地に立つと「お前たち人間は、ここに居てはいけない」と自然から言われているような気がしていました。だからこそ、そうではない場所をつくりたいと思っています。新しい技術を使い、新しい未来を切り開く、それでも人間的な空間を生み出し得るのだ、ということを示す役割が建築家には課せられているような気がしています。

何かゴールがあってテープを切るだけというような話は、過去にすべて失敗してきています。わが国が、縮退・成熟・ストックという分かりやすい結論に向かっていくビジョンはあまりに楽観的です。この国では常に何かが起きているからです。「人口」「技術」「自然」といった外部的なインパクトを常に念頭に置くべきです。われわれの身の回りに起こる大きな変化を想像し、まずそれを人として受け止め、その上で建築家として何ができるかが問われているのだと思っています。

新しい時代の生活、文化のあり方示す

建築保全センター理事長
尾島　俊雄氏

２０１４年度公共建築月間の記念講演会は、「建築・都市とストック社会」シリーズの第３回として、内藤廣先生に講演をお願いいたしました。

内藤先生は、早稲田の建築を出て東大の土木で教えるという通常はあり得ない経歴を持つ方で、ストック社会における新しい価値観や生き様を教えてくださると思います。

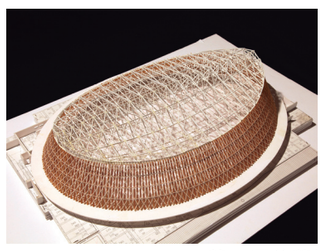
このシリーズの講演者の生き様を振り返りますと、建築を大胆に見直しながら長寿命化の努力をされる第１回の青木茂先生が豊臣秀吉の「鳴かぬなら鳴かせてみようホトトギス」、生命論的木造建築を突き詰めていく第２回の北川原温先生が徳川家康の「鳴かぬなら鳴くまで待とうホトトギス」と例えることもでき、そうならば、生と死ほども異なるものを一緒にしてしまう内藤先生は織田信長の「鳴かぬならころしてしまえホトトギス」ともいうべき印象です。

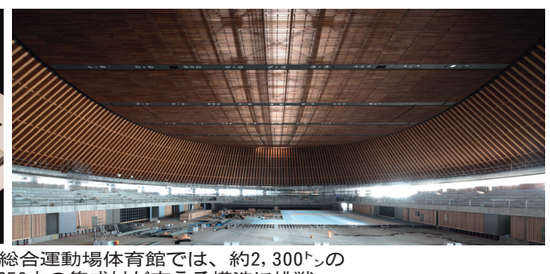
例えば、内藤先生が設計された「島根県芸術文化センター」は、私にとっては恐ろしい建築です。大屋根や壁、床がすべて石州瓦に囲まれ、その姿が水盆に映り、天と地、音楽と美術を一緒にした建物で、そこに立っていると独自の世界に惹きこまれます。

ストック社会のあり方というのは、実はまだ分からないところがあるのですが、内藤先生には、新しい時代の生活や文化のあり方を示していただけることを期待しています。

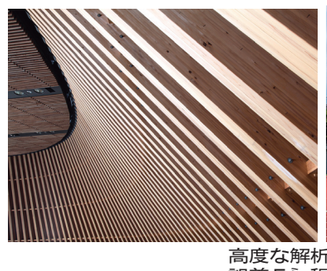
新しい技術で未来切り開く使命

変化受け止め、何ができるか

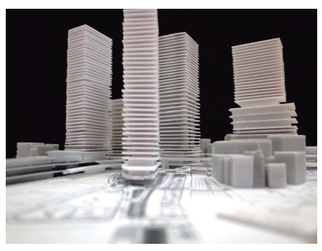


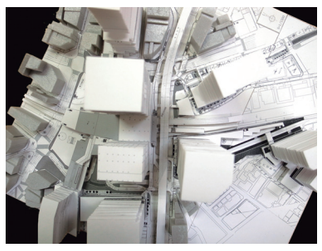


静岡県草薙総合運動場体育館では、約2,300㌧の鉄骨屋根を256本の集成材が支える構造に挑戦



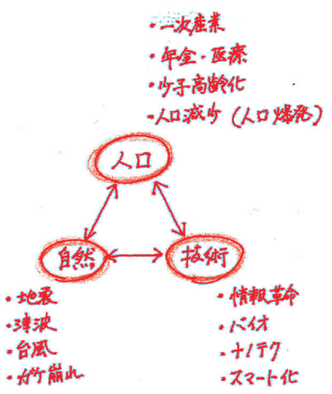
高度な解析やＢＩＭなどの新技術を活用し、誤差５㍉程度の精度で施工が進められている



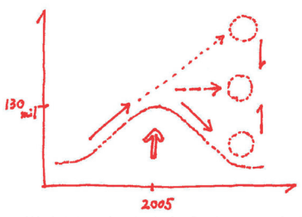


渋谷区都市再生特区のボリューム模型

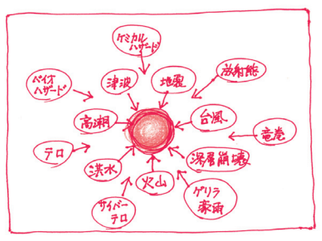
暮らしにインパクトを与える３要素

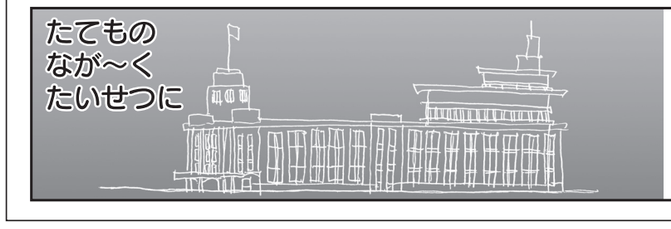


人口動態と世の中のイメージ



災害は思わぬ方からやってくる





（一財）建築保全センターは
建築物の維持管理、改修、施設マネジメントなどの保全に関する
調査研究、企画立案、技術開発等の業務を通して
公共建築物の適切な保全を支援します。

保全の情報センターとして
公共建築物の有効活用をサポートします。
一般財団法人 建築保全センター
BMMC BuildingMaintenance&ManagementCenter
〒104-0033　東京都中央区新川1-24-8　TEL.(03)3553-0070　FAX.(03)3553-6767
E-mail:info@bmmc.or.jp　URL:http://www.bmmc.or.jp